



Title	大阪府北部地震における災害ボランティアの共創：学生を中心とした「つっぱり棒の会」と「1年のつどい」
Author(s)	寶田, 玲子; 置塩, ひかる; 王, 文潔 他
Citation	未来共創. 2020, 7, p. 278-293
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76161
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪府北部地震における 災害ボランティアの共創

学生を中心とした「つっぱり棒の会」¹と「1年のつどい」

寶田玲子^a・置塩ひかる^b・王文潔^a・山本葉理^b

目次

プロローグ

1. 大阪府北部地震発生直後の大阪大学人間科学研究科・人間科学部の動き
 - 1.1 大阪府北部地震の概要
 - 1.2 大阪大学人間科学研究科・人間科学部の学生の活動
2. 「つっぱり棒の会」発足の経緯とこれまでの主な活動
3. 「大阪府北部地震 1年のつどい」報告
 - 3.1 「大阪府北部地震 1年のつどい」概要
 - 3.2 テーマ①「避難所の外国人の避難について」
 - 3.3 テーマ②「南海トラフに向けて」
4. まとめ—今後に向けて

キーワード

大阪府北部地震
災害ボランティアセンター
学生主体
地域連携
平常時のつながり

プロローグ

——2018年6月18日午前7時58分。授業に向かうため、まさに家を出ようとした瞬間だった。激しく床が揺れ、家じゅうの家具が動きだした。とっさに浮かんだのは机の下に潜るといふ教訓だけだった。だが、一人暮らしの家には身を隠すことができる机はないと、初めて気が付いた。ただ布団を被って揺れが収まるまで待っていた。揺れが落ち着き、テレビをつけようとするものの、テレビがつかない。ひたすらTwitterやYahoo! Japanのサイトで最新情報を収集した。家族や友人とSNSで安否確認もした。

翌日から、大阪大学人間科学研究科・人間科学部の教員・学生の有志とともに、

^a 大阪大学大学院人間科学研究科未来共生学博士後期課程；u642714a@ecs.osaka-u.ac.jp

^b 大阪大学人間科学部未来共生学

吹田市社会福祉協議会（以下、吹田市社協）の災害ボランティアセンターで活動することになった。社会福祉協議会は、地域住民の生活を支えるための福祉サービスの提供や、事業に取り組む民間の非営利組織で、災害発生時には、災害ボランティアセンターを立ち上げ、住民のニーズとボランティアのマッチングなどを担う。災害ボランティアセンターの立ち上げから携わり、地震の被害を目の当たりにする日々が続いた。日中は多くの人々とともに「力になれるなら些細なことでも協力したい」と活動した。活動しながら、ちょっとしたお手伝いで、依頼者の方が少し楽になった姿に励まされた。しかし家に帰ると、本震が後日来るのではないかという恐怖が生じる。また日常生活にいつ戻れるのだろうかという思いが募った。被災地で経験し生活し続ける中で、復旧・復興を進める難しさを痛感した――。

上記は、本活動報告の筆者の一人が体験した大阪府北部地震である。このように各地で大阪府北部地震を経験し、さまざまな状況下で「被災した人の力になりたい」と活動した学生が大阪大学人間科学部にも多くいた。この経験を記録として残し、見つかった課題に向けて平常時から活動していくべきではないか。そのような考えを持った教員・学生が自然発生的に活動を始め、今も継続している。本報告書では、大阪府北部地震後の私たちの活動と、各々の活動の総括として開催した「大阪府北部地震1年のつどい」までの経緯をまとめる。

1. 大阪府北部地震発生直後の大阪大学人間科学研究科・人間科学部の動き

1.1 大阪府北部地震の概要

大阪府北部地震の概要を述べる。気象庁（2018）によると、大阪府北部地震は2018年6月18日7時58分に発生、マグニチュードは6.1、震源は大阪府北部で深さ13kmだった。大阪府内の5市区で震度6弱を観測したほか、京都府京都市、亀岡市など18の市区町村で震度5強、近畿地方を中心に関東地方から九州地方の一部にかけて震度5弱～1を観測した。本学が所在する大阪府吹田市でも震度5強を観測し、1995年に発生した兵庫県南部地震（通称：阪神・淡路大震災）以来の大きな地震であった。

1.2 大阪大学人間科学研究科・人間科学部の学生の活動

人間科学研究科・人間科学部の学生たちが行った主な活動は、以下の表のとおりである。特筆すべき活動については後に詳述する。

表1 2018年6月18日－2018年7月5日 大阪府北部地震記録整理一覧

活動日	活動内容
6月18日	先遣隊：高槻市や吹田市等を車で回り、情報収集
6月19日	吹田市災害ボランティアセンター：センター立ち上げの会議、活動 先遣隊：飲用水の配布 その他：避難所情報収集、箕面市立豊川南小学校訪問
6月20日	箕面市立豊川南小学校 留学生避難者の対応
6月21日	箕面市立豊川南小学校 留学生避難者の対応 吹田市災害ボランティアセンターでの活動
6月22日	吹田市災害ボランティアセンターでの活動 大阪大学 夜間相談所設立の動き
6月23日	吹田市災害ボランティアセンターでの活動 OOS 連携会議の参加（教員、NPO 法人職員） 大阪大学 夜間相談所 見回り（吹田キャンパス、豊中キャンパス）
6月24日	吹田市災害ボランティアセンターでの活動
6月25日	吹田市災害ボランティアセンターでの活動
6月26日	吹田市災害ボランティアセンターでの活動
6月27日	吹田市災害ボランティアセンターでの活動
6月28日	吹田市災害ボランティアセンターでの活動
6月29日	吹田市災害ボランティアセンターでの活動、物資調達
6月30日	吹田市災害ボランティアセンターでの活動
7月1日	吹田市災害ボランティアセンターでの活動（最終日）
7月5日	検証・提言会議（NPO 法人にて）
7月2日～ 31日	きららスマイルセンター（復興支援センター）での活動

発災した6月18日は各自、安否確認を行った。その後、午後から集まること
が可能な学生は渥美先生と稲場先生とともに地域を車で回った。震源地の高槻市
や吹田市を回り、住民の方々に声をかけながら被害状況を把握した。近隣のスー
パーやコンビニでは飲用水、食料が売り切れており、不安を感じている人も多かつ
たと考えられる。

翌19日午前、吹田市社協から先生方に支援の要請があり、災害ボランティア
センター設立の会議に参加した。大阪大学オムニサイト（OOS）協定²を締結して

いる日本災害救援ボランティアネットワーク（NVNAD）の寺本氏、ならびに本学の学生も同席した。この会議では災害ボランティアセンターの活動予定、ニーズの収集およびマッチング、ボランティアの対象となる活動内容などについて話し合った。午後からは、吹田市社協と学生の一部で、ニーズの整理とセンター内の整備を行った。また、渥美先生、稲場先生を中心に、「金光教大阪災害救援隊」のT氏もワゴン車にペットボトルの水を大量に積んで駆け付け、18日に回った家庭に飲用水を配布した。

20日以降は災害ボランティアセンターでの活動が中心となった。各自で災害ボランティアセンターに赴き、ニーズとのマッチングを経て活動を行った。倒れた家具を起こしたり部屋を片付けたりすることが多かった。中には、発災以前から生活に困難を感じていたと推測される人が、地震をきっかけにSOSを出した例もあり、平常時から福祉のサポートやご近所での助け合いをする重要性を目の当たりにした。

ここで大阪大学吹田キャンパスの近隣で起きた事例を挙げたい。日にちが前後するが、6月19日（すなわち地震発生の翌日）の夕方に箕面市小野原で断水しているという情報が稲場先生に入った。箕面市小野原は吹田キャンパスに通う学生が多く住む地域であったため、その地域にある箕面市立豊川南小学校（以下、豊川南小学校）の避難所に向かうことになった。行ってみると、外国人留学生やその家族が殺到していた。その小学校の周辺では、19日夕方には水・電気は復旧していたものの、家屋にひびが入ったり家具が倒れたりする被害が見られ、依然として片付けが進んでいない様子だった。小学校に避難している人のほとんどは、留学生やその家族であった。彼らは、地震の経験がなかったため、外国人留学生やその家族が、「夜に眠るのが怖い」「一人だと不安」と避難所に集まった。

避難所の運営に携わっていた箕面市の職員に伺うと、発災した18日は約130人、翌19日は140人が避難所に集まり、その9割以上が外国人だった。文化や言語の違いに対応するため、ハラルフードや祈りの部屋の準備、多言語の情報提供がなされた。共生学系で水・衛生問題を研究している杉田先生もその場に駆けつけ、トイレの清掃など見落とされがちな点をフォローした。この指摘を受けて、NVNADの支援のもと清掃道具が提供された。19日の夜には、20日朝に豊川南小学校の避難所が突然閉鎖されることが決まり、不安を抱いたままの留学生は行き場を失った。逆に、もう地震が来る恐れがなくなったために避難所が閉鎖されたと勘違いし、良くも悪くも安心した留学生もいた。これらの動きをふまえて先

生方が大学側に働きかけ、その結果、21日より吹田キャンパスと豊中キャンパスに夜間相談所が設立された。夜間に体育館を開放し、不安を感じたり生活に困難をきたしたりしている大阪大学の学生・教員およびその家族を受け入れた。夜間相談所は24日朝までの3日間設置された³。

以降、7月5日ごろまで、各自が災害ボランティアセンターを通じて支援活動を行った。特に大型ごみの処分などは、地震発生から数日たってから要請されることが多く、次々に災害ボランティアセンターに連絡が入った。そして重要なこととして、ボランティアの人と話す機会を得て、精神的に楽になることができたという声もうかがった。その一方で、被災しながらもボランティアに参加した人の多くが、活動を通じて活力をもらったと後にふりかえっていた。

そんな中、地域に学生がボランティアに来ることを受け入れてくれる依頼者が多くいた。そのような声もふまえ、吹田市社協と有志の学生が連携して、学生のボランティア参加を呼びかけ支援することになった。私たちは「オンラインボラセン」と名付け、吹田市でのボランティア活動と学生をマッチングした。これは、事務局長の広田氏を中心に吹田市社協の方が尽力してくださったことで実現した。そして、有志の呼びかけに、人間科学研究科・人間科学部の学生13名が手を挙げた。オンラインボラセンに参加した学生は、「個人ではどうしたらいいのかわからなかったが、オンラインボラセンを窓口として地域に参加できるようになった」という感想をくれた。この言葉からわかるように、オンラインボラセンは被災地と接点がないために躊躇していた学生を支援できた一例だと言える。

研究室やオンラインボラセン等を通じて、吹田市の災害ボランティアセンターで活動した大阪大学人間科学研究科・人間科学部の学生は19名、参加回数は29回に上った⁴。



図 1. 災害ボランティアセンターでの様子



図 2. 待機するボランティア

2. 「つっぱり棒の会」発足の経緯とこれまでの主な活動

前章では、大阪府北部地震発生後に大阪大学人間科学研究科・人間科学部の学生・教員が自主的に行った活動を詳述した。活動は、多方面かつ同時期に複数個所にわたっていたため、各自記録をつけ、必要に応じて相互に報告・連絡をする形で情報を共有していた。しかし、全体の動きを把握することはできておらず、また、活動する中で直面した課題や今後に向けた提案などを共有する場もなかった。そこで、今回の災害やボランティアの経験を今後の改善につなげるべく、我々の活動全体を記録に残すとともに、その中で見えてきた課題や今後必要とされる対策について互いに共有し、議論を行う場を設けたいと考えた。こうして2018年10月9日、大阪大学人間科学部棟本館にて大阪府北部地震での活動を反省し、次へつなげるための会議が行われた。

第1回会議の参加者は、主に大阪府北部地震発生後に何らかの支援活動を行った共生行動論・共生社会論・国際協力学の学生と教員、NVNADの寺本氏であった。各研究室の教員が呼びかけ、20名ほどが集まった。ここでは、主に3つの事柄が確認された。以下、記録は会議の議事録に依拠する。

まず、会議の目的と、まとめた記録を外部に発信することについて確認がなされた。大学本部や人間科学研究科・人間科学部の学生、地域住民やNPO職員に対して実態を報告し、対応の必要性を訴えるとともに、研究者に向けて学術的な発信をすることも考えられた。特に、複数の研究者が同じフィールドについて記録するチームエスノグラフィについて、その実践例となることが目指された。次に、本会議における4つの分野を設置し、各担当者を決めた。分野とは、①新入生企画、②留学生企画、③シンポジウム、④ジャーナルである。最後に、本会議の名称を「つっぱり棒の会」(平常時は目立たないけれど、いざという時に役に立つ存在という意)と定め、会議の定期的な開催と活動の記録、外部への発信を行っていくこととした。

こうして、つっぱり棒の会が発足し、以後、2か月に1回ほどのペースで議論を重ねた。各回の開催日と主な議題は、表2の通りである。

表2 「つっぱり棒の会」の開催日と議題

回	日付	主な議題
第1回	2018年 10月9日	<ul style="list-style-type: none"> ・会議の目的 ・各分野担当 ・会議の名称
第2回	11月27日	<ul style="list-style-type: none"> ・大阪府北部地震に関するアンケートの作成 ・「阪大もん」企画 ・「学生出前カフェ」提案 ・話題提供「外国人被災者への対応」 ・岡山県倉敷市真備町での活動呼びかけ
第3回	2019年 1月22日	<ul style="list-style-type: none"> ・大阪府北部地震に関するアンケートのプレテスト ・チームエスノグラフィ研究会発足 ・「阪大もん」企画 ・すいすい吹田⁵（「学生出前カフェ」より発展）の進捗
第4回	2月21日	<ul style="list-style-type: none"> ・大阪府北部地震に関するアンケート、最終確認 ・すいすい吹田活動報告
第5回	5月14日	<ul style="list-style-type: none"> ・大阪府北部地震に関するアンケート、活用方法 ・チームエスノグラフィ研究会報告 ・すいすい吹田活動報告（サロン見学を経て） ・「阪大もん」報告
第6回	6月4日	<ul style="list-style-type: none"> ・「大阪府北部地震1年のつどい」企画 ・話題提供「被災者を対象とした調査の倫理的配慮」 ・真備での活動呼びかけ
第7回	6月25日	<ul style="list-style-type: none"> ・「大阪府北部地震1年のつどい」企画 ・すいすい吹田活動報告（防災ツアー） ・今後の活動
第8回	7月1日	<ul style="list-style-type: none"> ・「大阪府北部地震1年のつどい」開催
第9回	7月9日	<ul style="list-style-type: none"> ・「大阪府北部地震1年のつどい」ふりかえり・報告書の企画 ・「阪大もん」分析報告 ・真備での活動報告
第10回	7月30日	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションツール（Slack）の導入 ・「大阪府北部地震1年のつどい」報告書の作成 ・今後の活動
第11回	9月19日	<ul style="list-style-type: none"> ・「大阪府北部地震1年のつどい」報告書についての意見交換 ・Slackの学外連携への運用検討

2019年7月1日に開催した「大阪府北部地震1年のつどい」については、次章で詳述する。ここでは、つっぱり棒の会から生じた実践として、大きく2つを取り上げる。

1つ目は、「阪大もん」である。2019年4月に新しく人間科学研究科に入学する院生を対象に、つっぱり棒の会に属する院生が中心となり、防災に関するゲームを行った。具体的には、スマホ用のアプリケーションを用いて「阪大もん」と呼ばれるキャラクターを集めながらキャンパス内を歩いて回り、施設の場所や、平常時と災害時それぞれの役割などについて知ってもらうというものだった。本アプリケーションは、人間科学研究科がOOS協定を結ぶNPO法人北いわて未来ラボの協力のもとに開発された。同NPO団体は、東日本大震災で被災した岩手県野田村を中心に、子どもたちを対象に街を歩きながらその魅力や震災の傷跡、災害時に役立つ施設を発見するツールを開発し、イベントを開催している。つっぱり棒の会に所属するメンバーは、以前にも兵庫県西宮市で同団体のツールを使ったイベントを開催したことがあり、今回は大学院生を対象に、フィールドをキャンパス内に移しての試みとなった。

2つ目は、「すいすい吹田」という活動グループである。これは、大阪府北部地震発生後、災害ボランティアとして実際に地域で活動した学生が、厳しい現実を目の当たりにし、その問題解決のために何かできないかと立ち上げた団体である。地震で散らかってしまった部屋の片づけを手伝ってほしいとの要望で駆け付けたところ、服や家具、雑貨類等の荷物が部屋中に散乱し、生活するために必要なスペースが十分確保されていなかった。荷物の中には食べかすやねずみの糞が落ちており、ボランティアが大人数でごみを運び出したり掃除をしたりしても近所の方は誰も姿を見せない、というケースがあった。地震以前から何らかの問題があったことは明らかであり、地震が起きなくてもそのような方にアプローチすることはできなかったのか、地震のような緊急時の助け合いというのは、日ごろからのつながりから生まれるのだということ、それゆえ地域で孤立した方は災害時に脆弱な存在となりやすいことを痛感した。また、学生との関わりを喜んでくださる方々、若い世代が地域で活動することを歓迎してくださる方々との出会いから、これまであまりそのような機会がなかったことを実感するとともに、学生にとっても地域にとっても、そのような関わりには意義があり、平常時からの学生と地域のつながりをもっと促進したいと考えた。そこで、つっぱり棒の会に所属する寺本氏や学生に加え、会の呼びかけでボランティアや地域に関心のある学

生が集まって、2018年12月に第1回目の「すいすい吹田」の検討会議が開催された。すいすい吹田では、災害ボランティアセンターを運営していた吹田市社協の方にもご協力いただき、既存の活動を見学したり、自治会と共同でイベントを企画したりしている。今後は、メンバー勧誘のためのイベントや、継続的な自治会との関わり、新たな活動の企画等を検討している。



図 3. すいすい吹田の活動の様子



図 4. 住民の方々と地域を回る防災ツアー

このように、つっぱり棒の会では、情報の共有や議論を重ねる中で様々な実践や企画の案が生まれ、実行に移している。例えば、連絡手段は、当初よりメーリングリストを利用していたが、より円滑で活発な議論のため Slack というコミュニケーションツールを導入することとした。学外との連携は特に、多くの方々のご協力あってのことであるが、大阪府北部地震での気づきや課題を今後に活かす、という「つっぱり棒の会」の目的は達成されていると言えるのではないだろうか。しかし、防災に終わりはない。まだ取り組めていない課題も含め、今後も継続的な実践とさらなる発展を目指し、活動を続けていく。

3. 「大阪府北部地震1年のつどい」報告

3.1 「大阪府北部地震1年のつどい」概要

2019年7月1日(月)に、大阪大学人間科学部棟北館2階ラーニングコモンズにおいて、大阪府北部地震1年のつどいを開催した。当日は、発災当時からかわり続けてきた吹田市社協、箕面国際交流協会や地区防災委員、地域住民の方々をはじめ、他大学の教員や災害ボランティアサークルの学生たちも加わり、参加

人数は32名であった。

まず、つっぱり棒の会メンバーより本会開催の経緯と主旨について説明し、その後、参加者全員で自己紹介を行った。全員の自己紹介が終わった後、あらかじめ5人～6人程度に分けられたグループで、「避難所の外国人の避難」および「南海トラフ地震に向けて」についてディスカッションした。ディスカッションには「えんたくん」と呼ばれる円形の段ボールで作られた模造紙を使用し、机は使わず、円陣を組んだメンバーの膝に「えんたくん」をそれぞれ乗せながら模造紙に書き込み、議論をかわしていった。ディスカッションの後、各グループで上がってきた意見を発表し意見交換を行った。



図5. 学生による挨拶

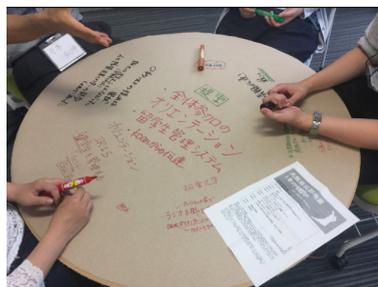


図6. 「えんたくん」を膝に置いて書き込んでいく

3.2 テーマ①「避難所の外国人の避難について」

最初のテーマである「避難所の外国人避難」について、参加者は大阪府北部地震後の実体験をふりかえりつつ、今後の災害に向けた案を考えた。参加者の中には、大阪府北部地震後に指定避難所であった豊川南小学校を訪れた方、避難所運営に携わった箕面市国際交流協会と地区防災担当の方、運営ボランティアの学生、自宅避難や避難所で過ごした留学生などがいたため、ディスカッションの中で立場や経験の違いによる多様な考え方が示された。

大阪府北部地震発生後、避難所に避難する日本人が少なかったのに対し、留学生をはじめとする外国人が多数避難したことについて、参加者の間で意見が交わされた。地震後、豊川南小学校を訪れた参加者は、地震前の情報提供では特に大々的な案内をしていなかったにもかかわらず、「豊川南小学校に避難してきた

8～9割が外国人で驚いた。想定外だった」と当時の状況をふりかえった。実際に避難者のほとんどが阪大の留学生であったと、豊川南小学校に訪れたことがあるほかの参加者からも証言された。一方で、避難所への避難をためらう外国人のケースも報告されている。「地震の後に落ち着いていた日本人を見て、逆に戸惑った」、「日本人の反応を見て動いてしまい、結局避難しなかった」といった声が聞かれる一方で、外国人の様子を実際にシェアハウスで見た留学生からは、「日本人の知識や落ち着きが、時には安心に変わった」という意見も出された。「日本人は防災に詳しいイメージがある」という留学生の発言を聞き、「日本人って思ったより防災知らないよね」と漏らした日本人の姿が見られた。防災に詳しいという、外国人が日本人に対して抱くイメージと実際の行動との間に、ギャップが見られることについては、留意すべきであると会場の参加者全体で共有した。自国の防災訓練以上のことはできない。災害が発生する際に想定外のことも起こりえるため、外国人の避難行動から学べることもあるという話が出た。また豊川南小学校では、当時礼拝室やハラルフードの提供など外国人避難者に対する配慮がなされた。このように、避難所では宗教的配慮が求められることに加えて、名簿の作成や個人カード形式（国名、ベジタリアン、アレルギーの有無など）で避難した外国人の情報を把握する必要があると参加者から指摘された。加えて避難所のトイレの使い方など、日本人にとっては当たり前と思われる常識が、外国人の間では共有できていないといった課題もあるため、避難所の使い方を多言語で表記したパンフレットを設置するよう要望が出された。

また外国人に防災・災害時情報を伝える時期、方法、言語についても、活発な議論が展開された。これらのことは大阪府北部地震後の外国人の避難時における問題の要因にもなり、多くの参加者から課題として提起された。例えば、「正しい情報が不足している」という声が複数のグループからあがった。この点について外国人コミュニティでは、母国語で話せることによる安心感はあるが、曖昧な情報が錯綜してしまうこともしばしばみられるため、外国人同士で集まっても不安が解消されるわけではない。外国人のみが集まるグループやネットを通して、負の感情が伝播することも懸念される。したがって、正確な情報にアクセスする方法などを知っている人が、情報を求める外国人に伝える必要がある。これは外国人に限ったことではなく、その土地になじみのない人、偶然、被災地に居合わせた人についても、共通のことが言えるのではないかという話が出た。また防災情報や避難経路については、日本語表示しかないなど言語パターンが少ない

ため、避難時に必要とされる情報の不足が支援につながらない要因となる可能性がある。大阪府北部地震後、災害ボランティアセンターの立ち上げにかかわった社会福祉協議会の職員が、「被災者のニーズを把握していったものの、外国人被災者からの訪問要請がなく、情報提供がどこまで浸透しているのかが不明である」と指摘した。多言語の案内を増やすだけでなく、外国人向けの多言語アプリの開発も視野に入れる必要がある。また入学時のオリエンテーションに、留学生向けに分かりやすい防災の講座を取り入れること、防災講座を参加しやすい時期と時間帯に設定したうえで、参加の義務化を検討することなど様々な提案が出された。KOANやお知らせメールによる迅速な情報共有など、大学の情報共有システムについて改善すべき点もあげられた。

さらに、災害時の外国人対応は地域の大きな負担であるという意見について、様々な意見が出された。外国人は地域の住民として認識されておらず、災害時の留学生の管理責任は大学が担うべきであるという考え方も根強い。人手が足りていない地域では、災害時における外国人への対応が後回しにされていた事例も聞かれた。こうした意見から、地域側の外国人に対する配慮不足が指摘できるだろう。

一方で、外国人しかいない避難所で共同生活することに日本人は疎外感を覚えることもある。大阪府北部地震の際に、日本人の高齢女性が英語の案内しか流されない避難所で居づらくなり、家に帰ってしまったことがあると、避難所運営の関係者がふりかえった。ある日本人の学生は、普段の経験をもとに「日本人は外国人に話しかけようとしなさい」と指摘し、やさしい日本語や簡単な英語で交流する経験を通して、少しずつ自信を獲得することが重要であると話した。また防災ワークショップ、避難訓練などを地域で行い、様々な人びとを防災に取り込むことが、災害時の共同生活の不安の解消につながるという意見が出された。これらのことから、日頃からの関係づくりが重要であると言える。話し合いの中で、「外国人」に対して、「地震などの災害の基礎知識がない、知識がないから不安になる」「土地勘がない」「災害が発生したら、母国へ帰りたいというのは普通の感情」「『外国』と言っても差がある」「観光客か、そうでないかによって対応も違う」など重要な視点が確認された。

ディスカッションの最後に、「留学生をはじめとした外国人は災害時に支援される側だけでなく、支援する側にもなるためにどうすればよいか」という問題提起が新たになされ、避難所を運営するにあたってボランティアをどのように活用すべきか、建設的な話し合いが進められた。

3.3 テーマ②「南海トラフに向けて」

大阪府北部地震における外国人の避難についての話し合いがなされた後、南海トラフなどの巨大地震に向けた対応についてディスカッションを行った。気象庁(2019)によると、南海トラフ地震は、静岡県から宮崎県にかけての太平洋沖のプレート境界を震源域として概ね100～150年間隔で繰り返し発生してきた巨大地震だが、1946年に発生した最後の地震からはや70年以上も経過していることから、次の南海トラフ地震発生切迫性が高まっているとされている。しかし、これだけの大規模災害となるとイメージがつかないところがあり、外国人の中には南海トラフといわれても知らない人も多い。参加者からも、「南海トラフのようにこれだけ規模が大きい災害があるとされると、どこが安全なのかも分からない」「あまりにも巨大な地震で想定できないため、イメージが湧かない」「『南海トラフって何』って思っている外国人も多い」とコメントがあった。それに対して、ポスター等で被害想定を数値化したものを提示するなど徹底した情報の把握や、大規模災害を「正しく恐れる」ことで、巨大地震に対する防災意識が高まるというのではないかといった意見が出された。

次に、災害が起きた時、どのくらいの被害が想定されるのかについて意見が交わされた。「人びとが活動している昼間などの時間帯に災害が起きた場合、多くの人びとが被災する可能性がある」「火災も心配だ」といった意見が出された。災害が起きた際の避難についても、「南海トラフのような災害の場合、大阪市内や大阪府南部の方に被害が大きくなるのが予想されるため、大阪府北部の方が支援する側にまわり、多くの人びとが北部に避難してくる。広域避難の際の受け入れ態勢をどうするのか」といった問題提起がなされた。参加者からは、「このような広域にわたる被害をもたらす災害の場合は、自分がどこで、災害をどう迎えるのか、考えておくことが大切である」といった意見が出された。

また、平常時からの備蓄をうまく使いこなしながら、いざという時の対応について、具体的にシュミレーションしておくにはどうすればいいのかについて議論がなされた。それについて、「家中のガラスや家財道具が床に散乱した状態で、慌ててベッドから降りて怪我をすることがあるので、スリッパを用意したほうがいい」「避難訓練や救命講習会などに参加しておく」といった意見が出された。一方で、「準備することが多いと、人びとが備えをやりたがらなくなる」「防災意識を持ち続けることは大変」という意見もあり、それに対して「できることからやっ

ていく」「ありあわせのものを使った防災スキルを身に着けておく」などの具体的な対策案が出された。

さらに、災害をわが事としてとらえることで、いざという時の対応について想像しておくことの重要性について話し合いがなされた。具体的には、「避難生活が長期化した場合の対応、遺体の扱い、備蓄をどうするか、火災防止、人権の問題、外国からの支援、ボランティアなどの受け入れなどを予め決めておく」、そしてそれを、「災害時には、誰が、誰と、何を進めるのか、決めておくこと」が大切であることが認識された。

最後に、日頃のつながりが希薄とされる学生や外国人、都市部に暮らす人びとなど、地域には様々な立場の人間が暮らしているという前提で、SOSを出せる体制やネットワークづくりを進めることが、困った時の助け合いにつながるという意見が出された。そのための対策として、留学生からは、「日本語ができる外国人は、災害時に通訳等の支援する側にまわることができるので、日本人も、日頃よりやさしい日本語の活用などを通じて、外国人とのコミュニケーションに慣れておいてほしい」といった要望が再び出された。参加者の中には『なんちゃってくりかえし防災』と毎週言われていると、印象に残っていくかもしれない、「あえて『南海トラフ』という言葉を使わないことで、日々の対応を積み重ねていくことが可能になるのではないか」といった意見が出され、日々の生活の中で防災を身近にとらえて考えていくことが、最終的に南海トラフといった大規模災害への対応につながるとされた。



図 7. 各グループの議論を全体で共有



図 8. 学生、教員、地域住民など 32 名が集まった

4. まとめ—今後に向けて

今回の「1年のつどい」を機に、防災や災害時に必要とされる情報を外国人にのみならず、地域になじみのない人や、たまたまその地域を訪問していた人びとに対しても、伝えていく工夫が必要であることが確認された。地域で参加しやすい防災講座や避難訓練を行い、多様な人びとを取り込んでいくことで人びとのつながりが生まれ、そのつながりが災害時の共同生活の不安の解消につながるとされた。大規模な災害に備えて、被災者の受け入れ態勢や避難所での役割分担、地域の構成員として普段組み込まれていない外国人や、学生も含めた防災活動など、地域でどのように行動するのかを具体的に話し合っておくことが重要であるという指摘もなされた。

大規模災害への備えは、いかに「じぶんごと化」してとらえているかが焦点としてあがったが、実際にはイメージできていない部分が多くあることも、ディスカッションを通して明らかとなった。改めて、災害をわが事としてとらえて議論することが、いかに困難なものであるかを確認できたことが、「1年のつどい」の最大の成果といっても過言ではない。地震で被災した際、孤立した状況を経験してとても不安に思い、学生として、普段から地域住民とのつながりを築いていくことがいかに大切かということに気付かされた。大阪大学のキャンパス自体も被災して大変な状況に追い込まれたが、一方で、大学側の危機管理体制が不十分であったことも明らかとなった。今回参加いただいた地域の方々からも、これを機会に、大学と積極的に意見交換をしていきたいという意見をいただいている。つっぱり棒の会として、今後も地域の方々とは様々なテーマを設定し、議論を重ねていくことで、大学を含む地域全体としての災害への取り組みに寄与したいと考えている。

大阪府北部地震が発災した直後から約1年間の活動をふりかえってみて、様々な活動を大学の教職員と学生、支援者や地域の方々とは協働して行ってきたと実感している次第である。これまでも、国内外で起きた災害への支援や災害に関する研究活動を行ってきたが、大学が所在する地域が被災地となり、自分たちも被災した当事者として活動に参加したのは、おそらく大阪府北部地震が初めてではないだろうか。当事者として被災地にかかわることで、継続した活動を行っていくための新たな課題も見えてきた。学生の視点で活動の継続性を考えてみた場合、一定期間しか地域で活動に参加することができないといった難しさがある。学生

たちの継続的な活動を促していくためにも、これから活動しようと思っている学生たちが、少しでも意欲的に参加できるような環境を整備していくことが大切である。そのためには、学生たちだけではなく、大学全体が積極的に環境整備にかかわっていくことが求められる。この大阪府北部地震1年のつどいが、そのスタートを切る絶好の機会となることを期待している。

注

- 1 執筆担当者以外の「つっぱり棒の会」の活動を支えてきた当時のメンバー（順不同・敬称略）には、渥美公秀、稲場圭信、杉田映理（以上教員）、NVNAD 寺本弘伸（NPO 法人職員）、陳重道、大門大朗、林亦中、関雅利、宮前良平、佐々木美和、翁婉秋、曾翁如（以上学生）が含まれる。
- 2 大阪大学人間科学研究科附属「未来共創センター」のプロジェクトの一つで、支え合う社会、共生社会を創造していくための新たな共創の仕組みを実現する協定。
- 3 夜間相談所の開設は大学のホームページで発表されなかった。被害に遭った学生に教員から直接伝える形式を採り、SNSでの拡散はもちろん、被害が大きくないと判断された学生への伝達は控える方針だった。そのため開設したことを知っていた学生はごくわずかだった。3日間で利用者はのべ5名だった。
- 4 このオンラインボラセンを通じて、7月5日以降も活動を継続した学生もいる。もちろん個人で参加したり吹田市以外で活動したりした学生がいるため、この数字は氷山の一角に過ぎないだろう。そしてこの取り組みが、支援活動の収束後も継続的に地域と大学生をつなぐきっかけとなった。
- 5 大阪府北部地震でのボランティア活動をきっかけに、日常のつながりを活性化していく取り組みを地域住民や社協の方々と協働していく学生グループを立ち上げた。

参考文献

気象庁

2018 「災害時地震報告 平成30年6月18日大阪府北部の地震」 https://www.jma.go.jp/jma/kishou/books/saigaiji/saigaiji_2018.html（閲覧日2019年9月30日）

気象庁

2019 「南海トラフについて」 <http://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/nteq/index.html>（閲覧日2019年9月30日）

Clerke, T. & Hopwood, N.

2014 *Doing ethnography in teams: A case study of asymmetric in collaborative research*. New York: Springer.